



三井楽エリアには「快水浴場百選」に選ばれている  
高浜海水浴場もある



姫島が浮かぶ大海原を背にして立つ辞本涯の碑



瀬ノ元カトリック墓碑群から長崎鼻灯台を望む



散策にもサイクリングにも気持ちいい夕映えの路

島を楽しむ  
3つの旅

三井楽コース

日本遺産を  
めぐる旅

1

# 亡き人に逢える 日本最果ての地

夕 映えの路を進んでゆくと、カトリック墓碑が見えてきた。最初はマリア様が優しく微笑む立派なお墓ばかりが目に見え込んでくるが、よく見れば、墓石が寝ているものや、教会をイメージしたかのような造りのお墓などがあり、それぞれに故人が偲ばれる。海を背にして立つカトリック墓碑群は、五島らしい風景のひとつといえるだろう。

最後に訪れたのは柏崎公園に立つ辞本涯の碑。辞本涯とは「日本の最果ての地を去る」という意味で、遣唐使船で唐に渡った空海が残した言葉。この三文字には、日本最後の地を去ろうとする空海の強い覚悟が表れている。坂口さんは空海について次のように話す。「空海さんは帰りの玉之浦の大宝の浜に上陸したといわれています。行きも帰りも五島に立ち

寄っていることから、島には真言宗のお寺が多く、空海さんに関する民話もたくさん残っています。お人柄が素晴らしかったからこそ、そうした話が語り継がれたのでしょう。島の人たちは今でも空海さんに特別な親しみを抱いているんですよ」。

三井楽は十世紀に書かれた『蜻蛉日記』に「亡き人に逢える島——みみらくの島——」と紹介されており、後には異国との境界にある島、亡き人に逢える西方浄土の島として広く歌枕となっていた。三井楽は書物の中で、いち早く名が知られた地です。亡くなった人に逢えるくらい西の果てであったこの地は、今の私たちに与っては宇宙の果てのような感じなのかもしれませんね。遣唐使船は四隻で一船団。約五百名で渡りました。空海さんが唐に渡ったのは八〇四年ですが、遣唐使の派遣は二十年に一度、十数回にわたって行われました。空海さんはもちろんですが、いろんな人たちが皆、命懸けで渡って行ったんですよ」と坂口さん。当時の船の構造や航海技術では、無事に帰ってこられるのは奇跡のようなものだったのかもしれない。辞本涯の地には、遣唐使として旅立つ我が子の無事を祈る母の歌が刻まれた碑も立っている。この時代、唐から最先端の文化や技術を持ち帰ることで日本の文化は花開いた。しかしその陰で愛する者との別れに涙した多くの人々がいたことを三井楽は教えていた。

